

ノ ー ト

学生相談室報告 (13)

額 額 康 兵

Report from the Counseling Room (No. 13)

Kohei KOKETSU

In this note, I briefly mention about the ego-identity and independence of young students in the modern society.

今回は青年の自立について雑感的に記してみたい。

(1) 延長する青年期

我々は通常「青年期」という概念を、人間社会が形成されている限りどの様な社会にも存在すると考えがちである。所が、未開社会では青年期という概念はなく体力さえ整えば成人として扱われる。又、歴史的に見ても17・18世紀以前は7才ぐらいを境にして大人と子供を分ける以外なんの世代区分もなかった¹⁾。ではなぜ青年期という考え方が生れたかといえ、近代に入って産業革命などによるブルジョワの成立で経済的余裕を持つ人が増え子供までを家の為に働かせる必要はなくなり、又、技術文明の発達により家庭内の教育だけではすまない部分が出てきた。すなわち未開社会では新成人に対して、ただ体力だけを求めていたのに対し、近代社会ではかつての成人・社会を越えるような教育を求める。このように考えるとき、現代社会において、経済的余裕が増え、社会変化のスピードが増せば増すほど青年期の延長が起きるのはうなずける。又、青年の立場から考えると「臥薪嘗胆を何年すればどうなるというタイムスケジュールが今日、一時代前ほどははっきりしない。」²⁾と言う状況とアルバイトなどの経済力がいまって成人社会への参加を急がない青年が増えている。

(2) 自立・個性化のプロセス

自立・個性化のプロセスはまず同性同年代の友人関係が重要な要素と考えられる。小学校5・6年生になるとボスのリーダーを中心とした弱肉強食のグループが形成されるが、その中では他人尊重の能力はまだ備わっていない。中学生ぐらいになると2~3人の仲よし集団が生まれ、ここでは友人の為には若干の自己犠牲をいとまず、自己中心的な思考・行動から友人の幸福の為に何をすべきかといった配慮を生み、この思考形態の変化は異性関係においても肉欲(生物的次元)による異性への接近を恋愛(心理的次元)へと変化させるのに大いに役立つ。そしてこの「愛」と「社会性」を持った友人関係がうまく形成できれば青年の自立は割合うまくいくと思われる³⁾。

次に重要なのは親との関係、友人との関係を通して、世界・他者を抽象化し、その抽象化された世界・他者を通して「自己」なるものを認識することであろう。すなわち、大人の行為にはそこに具体的な人や物が存っても、その事に対処するときの行為の中には他者一般・超越的な他者を認識したものが含まれているが、子供の行為にはそこに具体的な人や物が無くても、常に具体的他者・個別的なものを意識した行為(親に叱られる、友人に軽視される)などであり、そこには人間としてとか、道徳的に云々と

いう超越的意識はないであろう。が、そのような具体的他者を意識した行為もその中に含まれる共通性を学んでいくうちに、具体的他者の後ろにある他者一般が見えてくる⁴⁾。青年期は大人と子供の狭間であり、まさに具体的他者から他者一般が見えかくれる時期であり、超越的な事柄(神・自由・幸福・死)を考え始める。その他者一般が見えてくると、それを通して「自己」なるものを認識し、この認識が自分自身における同一性・単一性といったものであり、さらに、青年の自立・個性化に重要な要因となる。

(3) アイデンティティ

米国の心理学者E・H・エリクソンは神経症の青年を治療中、フロイド以来の「不安」を中心とした神経症とは違った「自分とは何か」「どういふ自分が自分らしいのか」といった実存的神経症を見いだした。彼は自我心理学の基本概念として「同一性(identity)」というものを提唱した。それは①生まれてこのかた自分は「一貫した存在」として生き続けており、さらに今後もその延長線上を生きるであろうという自覚であり、②自分という存在もしくは自分の生き方が、自分の生きている「社会によって是認」されているはずだという自信⁵⁾といったもので、この①と②すなわち、個人的同一性と社会的同一性の二軸があってこそ人間は安定感をもって生活できるということである。又、彼の自我論は、人間は生まれてから色々な人間関係を通して自我を形成し、そこで家族同一性・職業的同一性・性的同一性(ひらたくいえば商人としての自分、男としての自分)を共有し、その色々な条件化での自我が統一されて人格となったものを自我同一性と定義している⁶⁾。このように考える時、青年の自立・個性化はまさに「自我同一性」の獲得にはかならない。しかし、現代社会の社会制度の複雑化は個々の同一性を増やし、また、人間疎外のシステムは一つ一つの同一性の形成を妨げているように思われる。そのように見えてくると同一性の統合時、すなわち、青年期後期において「自分とは何か」「自分らしい生き方は」といった実存的不適応状態が生まれても不思議ではないであろう。

(4) 熟達とアイデンティティ

熟達の過程、すなわち事物に働きかけ他者との交流を通して人生を送っていく過程において、人々は自分自身の存在の意味についての問いを発しそれに

答えていくと考えられる⁷⁾。熟達というのは、労働における創造(自分の活動は自分なりのものという実感)、交流における愛(自分の活動が人の役にたちうるという実感)、自己統合(自分のあるべきすがたに近づいているという実感)を感じることが出来ると考えられる。この三つの実存的要求は「アイデンティティ」にはかならない。すなわち、達成感を持った熟達の過程は「アイデンティティ」の形成に大いに役立つということである。そのように考える時、青年の不適応状態の特徴として、アイデンティティの不確かさがあるが、熟達の過程を経験することによって人間はアイデンティティを確かなものにし、無気力、無感動を防ぐことができるのではないだろうか。

(5) 結び

以上、青年の自立・自我形成について述べてきたが、確かに現代は青年の自我形成を阻む要因が多くあるように思われる。が、ここで明確に“これが青年の自立だ”といった結論を導き出せるわけでもない。曖昧であるかもしれないが、言及出来る事は、現代の社会制度の複雑化は一つ一つの同一性を増し、又、人間疎外のシステム(管理社会)は一つ一つの同一性の形成を妨げ、自我を形成しにくくしているということである。が、あえて結論を出すのであれば、人間はどのような時代においても超越的・普遍的な何かを求めていたはずであり、その超越的・普遍的な何かがあって初めて社会や人間が存在し得るのである。そのようなものを縦軸において一つ一つの同一性を統合し自我を確立していくべきではないかと思われる。

参考文献

- 1) 津留 宏編：青年心理学，2，第一法規，東京，1981.
- 2) 笠原 嘉：アパシー・シンドローム，14，岩波書店，東京，1984.
- 3) 上述書：22—28.
- 4) “ ”：47—49.
- 5) 笠原 嘉：不安の病理，88—89，岩波書店，東京，1987.
- 6) 藤永保識編：心理学辞典，2—3，平凡社，東京，1981.
- 7) 波多野誼余夫，稲垣佳代子：無気力の心理学，98，中央公論社，東京，1977.

付記：過去1年間に学生相談室で取り扱った件数を
相談内容別に集計した下表を参照して頂き
たい。

相談内容別取扱件数

(平成元年1月18日～平成2年1月17日)

相 談 内 容	件数	%
1. 学業全般 (留年を含む)	62	41
2. 学生生活	55	36
3. 対人関係 (恋愛を含む)	14	9
4. 精神衛生	9	6
5. 進路問題 (専攻・就職など)	7	5
6. 健康問題	5	3
計	152	100

(受理 平成2年2月20日)